

「話す」「食べる」を保つ

「話す」といったコミュニケーションや、食べ物を含め込む嚥下などを支援するリハビリの専門家で、言語聴覚士。言語聴覚士を目指す学生を指導しながら、より効果的なコミュニケーション支援の練習法などを研究している。

最近、取り組んでいるのは、筋萎縮性側索硬化症（ALS）の患者と、支援に入る看護師らとの意思疎通で用いる「透明文字盤」の使い方をいかに習得してもらうか。目の動きで意思を伝える患者にとって文字盤は大切な手段だが、周りの人が使えないと会話にならない。難しさから途中で挫折する人が多いのが課題だった。盤上の文字列について、あ行、か行と五十音順に並べる方式より、それぞれ1行の文字が十字に並ぶ「フリック式」の方が、習得しやすいことを研究で明らかにした。支援者が学びやすいことを盛り込んで講習を組み立て、その効果も検証している。

口をつまぐ動かさない「構音障害」の人への支援にも長年関わってきた。ゆっくり話すことを意識つける補装具「ペーシングボード」を使う

愛知淑徳大健康医療科学部（愛知県長久手市）

教授・言語聴覚士

志村 栄二さん（45）



ことで、言葉の不明瞭さが改善するケースも。「患者さんの状態をよく観察し、仮説を立て、リハビリをする。働きかけの工夫で、できないことができるようになり、口から食べる、話すといった機能を維持できるのが、うれしい」。愛知県出身。高校の体育の授業でアキレス腱が切れ、リハビリを受けた。そこでリハビリを支える専門職に興味が湧いた。もともと「人の役に立ちたい」という思いが強く、世話になった理学療法士に相談。「これからは言語聴覚士だ」と勧められ、養成する大学に入った。群馬県の病院勤務などを経て、2014年に

愛知淑徳大へ。病院、診療所でも言語聴覚士として働く。3月に名古屋市で開いた文字盤の講習会では、ALSの男性（48）に有償で、受講者の練習相手になってもらった。受講者の評価は高く、他の誰にもできない役割を果たした男性の目は生き生きとしていた。「コミュニケーションを助けるだけでなく、その人の生きがいや尊厳を保つことを支える人」。志村さんが目指す言語聴覚士像だ。

（佐橋大）



透明文字盤を手にする志村さん。手前にあるのがペーシングボード

2025年5月6日（火）中日新聞朝刊より
この記事は中日新聞社の承諾を得て掲載しています。